

祭祀の儀典

諸橋 徹 次

一、求神

a 燔柴 瘞埋

b 灌鬯 炳蕭

c 燒香

三、器服

g 俎の祭肉

a 祭器

b 祭服

二、奠羞

a 意義

b 玉帛

c 棗盛

d 五齊 三酒

e 饗牲

f 籩豆の實

四、齊

五、仕官及び主

a 祝

b 尸

c 木主

祭祀に關する典禮儀式等を概括して茲に祭祀の儀典と題した。支那に於ては上代から既に天祀地祭人享の諸禮があり、隨つて、之に伴ふ色々の儀典が存在して居た。而かも其等の儀典は、或は其の儘に、或は幾分か形を變へた姿で我國に傳つてゐる。其の點支那祭祀の儀典の研究は、間接乍ら我國祭祀の儀典の研究にも役立つ者である。以下項目を分

けて之が略説を試みよう。

一、求神

求神とは祭祀を行ふに先立ち神の降臨を求むる事であつて、正に我國の神降しに當るのである。求神の方法としては、天神地祇には燔柴瘞埋の儀典があり、人鬼に就いては灌鬻炳蕭の儀典がある。先づ前者から簡単に説明する。

a 燔柴瘞埋

天を祭る場合に燔柴があり、地を祭る場合に瘞埋のある事は、禮記の祭法に出てゐる。燔柴[○]於泰壇、祭天也。瘞埋[○]於泰折[○]祭地也と云ふのが是である。此の文中に泰壇とあるは、云ふまでもなく祭天の壇を云ひ、泰折とあるのは、云ふまでもなく祭地の庭を謂ふのである。而して燔柴とは薪を焚くことであり、瘞埋とは犠牲の血竝びに牲幣を地に埋める事である。燔柴瘞埋は斯くの如くして祭天祭地の儀典となつてゐるが、扱て此の者は果して如何なる意味を有するであらうか。之に就いては學者の多くは皆其が神降しの方法であると主張してゐる。即ち唐の許敬宗は、天燔柴、地瘞埋、皆貴氣臭、用降神と言ひ、宋の陳祥道は、周人尙臭、外煙瘞埋、乃臭氣也、則天地之燔瘞、在行事之前矣と言ひ、二人共に燔柴瘞埋の習俗を以て周人臭を尙ぶの習俗に因んで神降しの爲の儀式であると爲してゐる。周人に臭を尙ぶ習俗の存したことは、禮記の郊特牲に殷人尙聲、周人尙臭と言ふ文句の存することによつても知る事が出来る。二人の説明は共に此の郊特牲の文から思ひ付いたものであらう。此の説は後世學者一般の肯定する所である。即ち燔柴瘞埋は臭氣を天地に通ぜしめ、依つて以つて神の降下を希ふ爲のものであるとする。但之に就ても異議論はない譯では無い。清朝の金鶚の如きは其の一人であつて、其著求古錄禮説の享神説の中に於て、燔柴瘞埋は享神の儀であり、求神の方法ではないと主張する。而して其の議論は、一つは道理の上から、他の一つは文獻を基礎としての他との比較の上から、進められて居るのである。金鶚に云はしめると、人鬼は次に述ぶるが如く、魂は天に歸し、魄は地に歸して居るから、之を呼び戻す爲に蓬蕭の煙の臭を天に達せしめ、鬱鬻の酒の臭を地に達せしめる必要もあらうが、天神地祇は元來天地の間に遍満してゐるもの

であるから、改めて求神の方法を講ずる必要はないでは無いかと言ふのである。此は道理であるが、更に亦文獻の上から他との比較を調べて見ても、先づ周禮太宗伯には左の文が出てゐる。

以_二煙_一祀_二昊天上帝_一。以_二實柴_一祀_二日月星辰_一。以_二標燎_一祀_二司中司命、羈師雨師_一。以_二血祭_一祭_二社稷五祀五嶽_一。以_二狸沈_一祭_二山林川澤_一。以_二醢辜_一祭_二四方百物_一。以_二肆獻裸_一享_二先王_一。以_二饋食_一享_二先王_一。

今平心で此の文を讀んでみると、文中に現はれてゐる煙祀實柴標燎は先に述べた燔柴に當り、狸沈等は先に述べた瘞埋に當る。その事は極めて明かである。鄭玄が實柴の實を牛なりとし、柴を上なりとして、之を以て血祭の名と爲さんとするが如きは元より當つて居らない。若し今述べた如く禮祀、實柴、標燎が燔柴に當り、狸沈が瘞埋に當るとすれば、更に燔柴瘞埋は次の文に現はれてゐる醢辜肆獻饋食と同格のものと考えねばならぬ。然るに此等醢辜、肆獻、饋食は、何れも神を享する爲のものであつて、神を降す爲のものではない。故に此の比較對照の上から見れば、燔柴瘞埋は當然神降しの方法ではなくして、享神の方法でなければならぬ、と言つて古來の説に反駁を試みるのである。金鶚の此の説は一應は考慮せられなければならぬ。特に二つの理由の中、後者の説明は幾分の理を含んでゐる様にも思ふ。併し其にしても文字の説明の上に無理もあり、特に前者の理由に至つては、全く牽強の説と見るべきであるから、矢張り古來の説を是認する方が適當であらう。況んや此のことは後に述べんとする燒香の起源が燔柴に存すといふ論のある事からも是認せられるからである。

b 灌鬯 燂 蕭

天神地祇の祭祀に燔柴瘞埋を用ひたと同じ様に、人鬼の祭祀には灌鬯燂蕭を用ひて求神の方法とした。鬯とは黑黍で造つた酒であり、蕭とは蓬に類する草である。此の酒を地に灌ぎ、此の蕭を燂いて、依つて以つて人鬼を迎へるのである。禮記の郊特牲を見ると、魂氣歸_二于天_一、形魄歸_二于地_一と出てゐる。人が死すれば、魂は天に歸り、魄は地に歸ると云ふのである。そこで此の神降しを爲さんが爲には、先づ鬯の酒を地に灌いで魄を呼び反へし、蓬蕭の煙を天に昇らしめて魂を呼び反へさうと云ふのである。灌鬯燂蕭を以て人鬼の求神の形式であることに就ては、古來一人の異論者も

無い様である。尙之に關聯して燒香の慣習が考へられねばならぬ。

c 燒 香

上述祭祀に用ひた燔柴燔蕭の風俗は、後世に至ると燒香の形に變つて來た。支那の祭祀に於ける燒香の起源發達に就ては、清朝の左暄が其の著三餘續筆の中に於て、祭祀用香の一文を掲げ詳細に論じてゐる。今其の要を述べてみると、魏書の釋老志には、漢の武帝の元狩年間、霍去病將軍が金人帝を得て甘泉宮に安置し、之に對して燒香禮拜したことが出て居り、燒香の制度が漢代既に存して居つたらしく述べられてゐるが、之は恐らく後人の増飾であらう。確實なる文獻に依れば、燒香の初は、隋書の禮儀志に出て居る天臨四年の何佟之の上訴文に在りとしなければならぬ。其の上訴文中には、南郊明堂を祀るには沈香を用ひよ、沈香は天の質に基づく、北郊を祀るには上和香を用ひよ、上和香は地を以て人に親ましむ、

と出て居る。かくて燒香の風俗は南北朝に始つたものであらう。唐の「崔寧傳」にも開成年間に御祭に香を焚いたと云ふ記録が出て居り、宋史の「禮志」には、天地宗廟の常の祭には皆御封香を賜ひ、其が當時の定制になつたと云ふ事が出て居り、更に嘉祐年間の斐熈の上奏文には、大祠には御封香を、中祠小祠には大府香を御供へしたと云ふ事も出て居る。燒香の制は實に宋に至つて盛んになつたものである。後元史の「祭祀志」には、色々祭祀の用具を列舉し、中に香鼎・香合・香案等の文字も見えて居るから、當時も亦燒香の制度が盛んであつたものであらう。明史の「禮志」等には、御祭に先き立つ三日前香を行ふと云ふ規定の定められたことが記されて居る。尤も此の制度は、嘉靖年間に一度廢せられたやうであるが、又復活して以て今日に及んで居る。云々。

以上が左暄の記述の大體である。かくて燒香も祭祀の一儀典となつたが但此の燒香が、果して燔柴燔蕭の遺風であるかどうかは若干の疑問がある。或人は之は全然佛教の渡來に伴ふ印度風習の影響であるとしてゐるが、併し宋の元符元年に曾敔の奉つた文の中に、周人以「臭氣」事神、近世易之「以香」と言ふ文の存すること等から考へて、恐らくは又燒香

も燔柴燔蕭の遺風であらうと想像されるのである。

二、奠 羞

a 意 義

奠羞とは祭祀に當つて神に御供へする物を云ふ。此には玉帛・黍盛・酒醴・犧牲・簋豆之實・俎等の種類がある、が今其の各項の説明を施すに當つて、先づ此等の奠羞の持つ最初の意味に就て吟味してみたい。

思ふに奠羞は、神に玉帛其他を捧げる事に依つて神の意を迎へ、依つて以て己の幸福を希望したものであらう。斯かる幼稚な考は太古純朴の民の中には當然起り來る思想である。詩經の「小雅天保」の詩に、吉蠲爲饎。是用孝享。君曰卜爾。萬壽無疆と云ひ、「周頌豐年」の詩に、爲酒爲醴。烝畀祖妣。以洽百禮。降福孔皆と云ひ、「周頌潛」の詩に、有鱸有鮪。鰈鱣鰔鯉。以享以祀。以介是福と云ひ、更に「魯頌閟宮」の詩に、享以騂犧。是饗是宜。降福既多。と云つて居るが如きは、何れも奠羞を供ふる事に依つて神の意を迎へ、因て以て己の幸福を希求したものである。上代祭祀の奠羞の意義は之に依つて大體伺ひ知る事が出來ると思ふ。猶左傳の桓公六年には、隨公が楚を伐つことを計畫し、季梁と言ふ賢人が其の企てを諫止せんとした話が載せられて居る。其の時隨公は、吾牲牷肥豚。黍盛豐備、何則不僖。と云つて、自分は神に對して黍盛牲牷を十分に御供へして居るから、神に對して不僖の行動を取つたとは云はれない、故に神は當然我國に幸を下さるべき筈であると、極めて露骨な申し條を爲してゐる。同じく僖公五年には、宮之奇と云ふ賢人が虞公を諫めた話が載せられて居る。其の時にも、虞公は、吾享祀豐潔。神必據我と云つて、自分は御祭に際して豊かな清潔な御供へをして居るから神は自分を助ける筈であると云つてゐる。之に對して宮之奇は、鬼神は人を實に親しむに非ず、惟れ德に是依るなり、と云つて、書經周書の皇天無親。惟德是輔。と云ふ言葉や、或は君陳篇の黍稷非馨。明德是馨。と云ふ言葉等を引用はして居るが、要するに隨公や虞公の卒直な言葉の中に見える所が、奠羞の意義に就ての純朴な上代人の考へを偽りなく表したものであらう。孔子が論語に禮云禮云。玉帛云乎哉、と教へて居るところなどもあ

るが、此は後代文化の進んだ後の教訓であると見るべきであらう。以下簋羞の各々に就て説明する。

b 玉 帛

祭祀の簋羞の第一は玉帛である。玉帛の種類及び其の數量は、祭祀に依つて若干の相違はあるが、但玉帛を用ひると云ふ事は如何なる祭祀にも例外は有り得ないのである。然らば其の玉帛は果して如何なる物を選択するのであらうか。周禮大宗伯に據ると、其には皆有牲幣。各放其器之色、と出て居る。之に對する鄭玄の注は、禮神者、必象其類、と云つて、祭祀に御供へする玉帛の色及び種類その數等は、何れも其の類に従はねばならぬと説いてゐる。然らばその類に象るとは抑も如何なる意味であるか。大宗伯には前の文の次に以蒼璜禮天。以黃琮禮地、と述べ、其の文に就いて宋の楊復は、璜の圓きは天の圓きに象り、蒼の青きは天色の青きに象つたものである、と説明し、又清の秦蕙田は、琮の四角なるは地の四角なるに象り、琮の色の黄なるは地の色の黄なるに象つたものである、と云つて居る。太宗伯の所謂各放其器之色、と云ひ、鄭注の所謂禮神者必象其類、と云つて居るのは、要するに斯かる意味を云つたものである。その外周禮の「典瑞」を見ると、四圭有邸、以祀天。兩圭有邸、以祀地、と出て居る。四圭は天には春夏秋冬の四時があるから其の類に象つたものであり、兩圭は地の數は二即ち陽であるから、其の類に象つたのである。此亦前述の例と同じく、類を以て神を禮したものである。以上は天地を祀る際の玉帛に就いて一例を説明したものであるが、玉帛を供へることは、天地以外の祭祀に於ても、皆一樣に此の意味此の精神を以て行はれたものである。

c 黍 盛

簋羞の二に黍盛がある。黍盛とは神に供へる穀物の事である。神に供へる黍盛の材料は之を籍田に仰ぐ。禮記の「祭義」に天子爲籍千畝。諸侯爲籍百畝、と出てゐる。其の籍するとは籍田を耕す意味であつて、天子自ら籍田を耕し、こゝに黍盛の材料を求められ、諸侯も亦同一の事を爲すのである。籍田には句師を置いて之に關する全ての事務に當らしめてゐる。尙籍田の儀式は極めて鄭重を盡したものであつて「祭義」に於いては其の意味を説明して、以爲醴醑齊盛、於

是乎取之。敬之至也、と云つてゐる。其の他籍田に關する事は、禮記の「祭義」をはじめとし、「祭統」には天子親耕於南郊。共濟盛、と出て居り、「表記」には天子親耕。黍稷秬鬯。以事上帝、と出て居り、更に禮記の「月令」にも或は國語などにも數多く出て居るから、今はその細説は省略することにする。

d 五 齊 三 酒

奠羞の三に、五齊三酒がある。五齊三酒の起源は明水からだと言はれてゐる。

明水といふ語は禮記の郊特牲に見えてゐるが、その明水に就ての鄭玄の注には、司烺以陰鑑、所取於月之水と説明してゐる。上代に於いては、この明水を以て神に捧ぐる大切なものとしたのである。その後酒の發明せらるゝに至つてからは、元酒を以て神に供へることとなり、更に後代に至ると、此處に云ふ五齊三酒を供へるやうになつたのである。此の申、五齊とは一に乏齊と云ひ、二に醴齊といひ、三に盎齊といひ、四に緹齊といひ、五に沈齊と云ふのであつて、この五つのものはいづれも濁酒である。又三酒といふのは、一に事酒と云ひ、二に昔酒と云ひ、三に清酒と云ふのであつて、此等はいづれも皆清酒である。その中、泛齊とは成つて滓浮ぶ泛々然たりとあるから、一夜酒の薄いもの、醴齊とは醴とは體なり、成つて汁と滓と相將ふとあり、米粒のまだ崩れずにゐるものだから、これまた一夜酒。盎齊とは滓の大分解けて葱白色になつたもの今のろみ醴齊とは成つて紅赤、今の下酒なりといふからどぶろく、沈齊又は澄酒とは滓が沈んで上澄が出来たものである。次に事酒とは、鄭注に有事の酒、今の饌酒なりとあり、賈疏には冬釀して春成るとあるから、詩經の春酒であらう。又昔酒は今の酉、久白酒、所謂舊醖也とある。一夜酒の醴のことであらう。又清酒とは、今の中山の冬釀して夏に接して成るものとある。中山は酒の名所である。而してこの濁酒と清酒とに就いては郊特牲に説明する所がある。斯くの如く後にはこの五齊三酒が神に捧げられるやうになつたのであるが、其でも尙最初の元酒と明水とは依然として尊重せられてゐた。故に郊特牲に於いては、酒醴之美、玄酒明水、尙貴五味之本也といつてある。次に此の五齊は宋の陳氏の説明するところによれば、祭祀に五齊あるは以て之に神事するなりと云ふ。此のものが吾國の御神酒の起源たるは云ふまで

もない。尙後代に至ると、朝廷に酒正と稱する役人を定めて、此の五齊三酒に關する凡ての事柄を掌らせたものである。

c 犧 牲

羹羞の四に犧牲がある。犧牲は祭の種類によつて種々その物を異にするが、いづれも前に述べたその類に象るといふ點丈は同一である。今天地の祭に就いて一例を擧げてみよう。禮記の祭義には、祭天特性。と出て居り、書經の召誥には地を祭る場合を述べて「牛二」と出て居る。特は一は天の數であるから其の數を擧げて特を用ひ、二は地の數であるから其の類に従つて牛二を用ひたのである。又周禮の牧人には凡陽祀用騂牲、撰之。陰祀用黝牲、撰之。と出てゐる。騂牲とは赤い色の牛であり、黝牲とは黒い色の牛である。元來天の色は青であり、地の色は黄であるといふことは古來の定りであるが、陳氏の禮書にも既に説明するが如く、騂者陽之盛也。黝者陰之盛也、なるものであるから、陽である天を祭るに騂を以てし、陰である地を祭るに黝を用ひたものである。此等は犧牲の色の上の種類、並びに數の上の區別、何れも所謂その類に象るといふことを實現して居つた證據である。尤も書經湯誥には敢用玄牡。といふ語もある。その注によれば、殷の湯王は既に夏を滅ぼしたのであるが、なほ夏の習俗に従つて黒を尙べるなりとある。是を以て前述の禮記郊特牲の「牲用騂尙赤也。」と對照して見ると、郊特牲の分は周代を標準とし、周は赤を尙ぶ故に騂を用ひたものであらうとの想像が起る。蓋し上代の易姓革命はすべて五行の相生相克に依つて出来てゐると信ぜられて居た事から觀察すると、この想像は必ずしも誤ではない。これ陳氏の説とは異なる説明であるが、併し「その類に象る」といふ根本原理に於ては矛盾はないのである。

天子の用ひる犧牲は凡て諸侯に賦して之を献上せしめたものである。禮記の月令に、季冬之月。乃命太史。次諸侯之列。賦之犧牲。以共皇天上帝社稷之饗。と出て居るのが是である。斯くして諸侯の獻じた犧牲は、之を牢に繫いで菑ふ事三ヶ月、然る後に犧牲に用ひるといふことが定りであつた。此を司る役人は周禮の充人であるが、周禮充人の職には掌繫祭祀之犧牲。繫于牢。芻之三月、と出て居る。三月とは最大の月を稱したものであつて、短きは十日に限れること

もある。故に國語の楚語には、遠不_レ過三月。近不_レ過浹日。と出てゐる。以上が犠牲に關する大略である。

f 籩 豆

神に供へる籩羞の五に籩豆之實がある。籩豆に就いては後段祭器の條に説明するであらうが、籩豆之實は此の籩豆に盛られる籩羞である。扱て此の籩豆に如何なるものを盛り飾つたのであるか。禮記郊特牲には、籩豆之實水土之品也。不_レ敢用_二褻味_一而貴_二多品_一。所_レ以_レ交_二於旦明_一之義也。と出てゐる。詩經の召南采芣の詩を見ると、于以采_レ芣。于以采_レ芣。于以用_レ之。公侯之事。と出て居り、同じ召南采芣の詩には、于以采_レ蘋。南澗之濱。于以采_レ藻。于以采_レ藻。と出てゐる。此等の蘋・藻の如き水草が主として當代の籩豆之實となつてゐたものである。左傳の隱公三年を見ると、君子之言として苟有_二明信_一、澗溪沼沚之毛。蘋蘩蕰藻之菜、可_レ薦_二於鬼神_一。と出てゐる。水草などは卑薄のものではあるが、苟も心に明信さへあれば、其でも籩羞として籩豆に飾ることが出来るといふのである。而して詩經に見ても左傳に見ても、多く水草を用ひてゐるが、其の理由に就ては、毛詩會箋は、必_レ以_二水草_一爲_レ辭者。蓋取_二潔清事_一宗廟之義と。と言つてゐる。多分此の解釋を以て正しと爲すべきであらう。

朝廷に於ては籩豆を司るのに特別の役人を定めて居つた。籩を司るものは籩人であり、豆を司る者は醯人であつた。而して籩に四籩之實といひ、豆に四豆之實といふ。四籩四豆の四と言ふのは、一は朝事であり、二は饋食であり、三は加籩加豆であり、四は羞籩羞豆である。周官天官などで見ると、此の各々に盛る籩並びに豆の實は可なり多くの種類が列擧せられてゐる。併し此等は周代文化の盛になつてから後の事であつて、上代の姿は矢張詩經左傳などに見える水草などを主とした極めて質樸の者であつたであらう。

g 俎

籩羞の六に俎がある。特に宗廟の祭に於ては必らず此の俎を供へる。俎に上せてあるものは所謂祭肉であるが、實は骨を主としたものである。骨には貴賤の別がある。殷の人々は髀を用ひ、周の人々は肩を用ひて居る。大體身體の前部は後部

よりも貴い。而して貴きものを祭るには貴い骨を以てし、賤しい人を祭るには賤しい骨を以てするのは、祭統に

凡爲_レ俎者以_レ骨爲_レ主。骨有_レ貴賤、股人貴_レ髀、周人貴_レ肩。凡前貴_レ於後、俎者所_レ以明_レ祭之必有_レ惠也。是故貴者其取_レ貴骨、賤者取_レ賤骨。貴者不_レ重、賤者不_レ虛、示_レ均也。惠均則政行。政行則事成、事成則功立。功之所_レ以立者、不_レ可_レ不知也。俎者所_レ以明_レ惠之必均_レ也。善爲_レ政者如_レ此。故曰見_レ政事之均_レ焉、(禮記祭統)

と云つてゐるのは此の古の制度を示したものである。此の神に供へた俎は、祭の終つた後に同姓の人々、若くは特別關係の人々、或は又下の人々に分つと云ふことが例である。周禮の大宗伯に、以_レ展膳_レ之、禮_レ親兄弟之國。」と出て居るのは同姓の人々に之を分つたものであり、左傳の蔡邱の會に於て、王の使者宰孔が齊の桓公に胙を賜うて天子有_レ事_レ於文武、使_レ孔賜_レ伯舅胙。と出て居るのは、特別の關係あるものに祭肉を分つた例であり、祭統に夫祭有_レ卑_レ燂胞翟_レ者、惠_レ下之道也。」と出て居るのは下の人々に之を分つた例である。燂とは甲吏の賤しき者のことであり、胞とは肉吏の賤しき者のことであり、翟とは樂吏の賤しき者のことであり、闇とは守門の賤しき者のことであり。

斯くの如く祭の俎は必ず之を同姓の者に分ち、下の人々に分つを必要とすると云ふ事は、何の意味であるか。祭統は之に就いて、惠均則政行。と云ひ俎者所_レ以明_レ惠之必均_レ也と云つて居る。即ち惠を均しくすることに依つて政の均しきを致さんとするのであつて、其の根柢に於ては祭政一致の考の寓せられたものである。孔子が嘗て魯の國を去る時の理由として、膾肉至らざるを以て故國を去つたと云ふのも、其の點に意を用ひ口を假りたものであらう。尙又我國のナホラヒと云ふのも恐らくは此の祭肉の遺意であらう。

三、器 服

a 祭 器

祭祀に用ゐる器物を祭器と稱する。祭器に關しては、禮記の中に禮器の一篇があり、外に郊特牲の篇などを始めとして、周禮禮記などの彼此に可なり多く散見してゐる。

祭器の中主なるものは籩豆である。籩豆のことは爾雅の釋器に木豆謂之豆。竹豆謂之籩と説明してゐるから、之を統名すれば、共に豆と言ふべきであらう。而して此の豆は、三代の昔から祭祀として用ひられたものであつて、禮記明堂位には夏后氏以「楊豆。殷玉豆。周獻豆」と出てゐる。而してこの楊豆玉豆獻豆は單なる豆の種類ではなくして、寧ろ其の制其の飾其の用に就て云つたものである。何楷の説明するところによれば楊とは制に就いて言ひ、玉とは其の飾に就いて言ひ、獻とは其の用に就いて言つたものである。要するに此の籩豆が三代以來の祭器として用ひられたものであることは疑ふ可くもない。

祭器の第二に犧尊がある。牛の形をしてゐる酒を盛る器である。一に戲尊と書くこともあるが、其は勿論戲と犧との普通からである。さて尊とは樽に通ずるものであるから、犧尊が酒を入れる器であるのは明らかだが、犧とは抑何であらうか。鄭玄は犧の音を素何切、即ち[sa]と云つてゐる。而して更に説明を加へて、畫爲「手形」婆娑然、と云つてゐる。この説明は古來不可解とせられてゐたが、宋の學者に至つて始めて考證された。其は楚の國では、土俗牛の大なるものを沙つたから、大きな牛の意であらうと云ふのである。この説明によつて一先づ鄭玄のこれを[sa]と發音した理由は明らかになつたが、併し酒を盛る祭祀に何故牛を用ひたかといふ意味は全く不可解である。或人はいふ「耕すことは民の重大事である。耕すことは牛に依らねばならぬ。故に民事の最も大なる祭祀に牛に關する祭器を用ひたのであらうか。」と。又或者はいふ、「牛は動物中最も重寔で且つ從順なるものである。人が輕薄放逸であつては祭祀をして神に仕ふことは出来ない。故に祭祀をなすものは先づ以て牛の重寔に學ぶところがなくてはならぬ。此が祭器に犧尊を用ひた理由である。」と。此等は何れも一説ではある。さりながら兩説とも皆牽強を免れないので、要するに今日に於ては原因を明らかにし得ないのである。

祭器の三に越席といふものがある。越席のことは禮器の疏に詳説せられてゐるが、大略を云へば、越席は蒲を以て作つた筵であつて、所謂神席として敷くものである。人爲を盡せるものは天然に出づるものに比して質を失ふ憂ひがある。

故に此の越箒の如きを用ひて地を拂つて神を祀らんとするものである。

天を祭る場合に用ひる祭器は大體上述の數種であつた。地を祭るに用ひる祭器については、禮記・儀禮とも明らかに記すところはない。恐らくは天を祭るに準じたものであらう。人鬼を祭るに用ひる宗廟の祭器は、天祭の場合に用ひるものの外、凡・遂・鑑・蕭茅・巾褕・隔・勾等様々のものが經傳に散見してゐる。天地の祭祀にも或は此等のものを用ひたのか、其ははつきりしてゐない。

祭器は次に述べる祭服と共に人の最も大切に取り扱ふべきものとされてゐた。故に如何なる境遇の者でも、少くとも此だけは備へ齊へ、且如何なる貧困に陥つた場合にも之を賣ることは許されなかつた。而して若し不要となつた時には、之を穢さんことを恐れて、或は之を火中に投じ、或は之を地に埋めることになつてゐた。そのことは禮記の曲禮などの、君子雖^レ貧、不^レ粥^ニ祭器。雖^レ寒不^レ衣^ニ祭服。(曲禮)祭服敝則焚^レ之。祭器敝則埋^レ之。(同上)の語などに述べられてゐる。此は我が國の習俗も略同様だと思ふ。

㌞ 祭 服

祭服も三代以來ずつとその制が存したものと見える。禮記の王制に有虞氏・夏后氏・及び殷人がそれぞれ別の祭服を用ひて祭祀に従事したことを述べて、有虞氏皇而祭、夏后氏收而祭、殷人皐而祭、周人冕而祭。(王制)と云つてゐる。但今日に於ては勿論その詳細を知る方法はない。周に到ると、祭服の制度も稍齊つて來た。即ち天地の祭祀に用ひる祭服は冕と服とに定められたのである。此の中、冕は頸飾りであり服は大裘であつた。而してこの祭服を作り調へるのは、恰も男子が自ら耕して桑盛をつくると同様、夫人の仕事としては最も重大なるものの一と考へられてゐた。各層の社會に其の制はあつたが、暫く天子・皇后の場合について例をとつてみる。禮記の祭統によれば、王后蠶^ニ於北郊、以供^ニ純服^一と出てゐる。即ち皇后は祭服を作らんが爲に親蠶せられるのである。周禮の内宰に、中春詔^レ后、帥^ニ外内命婦、始蠶^ニ于北郊、以爲^ニ祭服^一と云つてゐるのも同一事である。此の行事の詳しいことは、更に禮記の月令に載つてゐる。以上は例

を皇后にとつた一の場合であるが、獨り皇后に限らず、諸侯・卿・大夫の夫人も凡て祭服をつくる事を以て婦人の重大なる天職と考へてゐた。

祭服の用ひ方に關する細な規定は周禮の司服に見えてゐる。其によると、昊天上帝を祭る場合及び五帝を祭る場合には、「天子は大裘を服して冕する。先公を享する場合には鷩冕する。四望山川を祭る場合には絺冕する。社稷五祀を祭る場合には絺冕する。群小祀を祭る時には絺冕する。」とある。天子の祭服は元來は十二章のものであつた。十二章とは日・月・舜より星辰・山・龍・華蟲・宗彝・藻・火・粉米・黼・黻である。この内、日より華蟲に到る六者は衣に描いた模様であり、宗彝より黻に至る六者は裳につくつた刺繡である。この制度を用ひてゐたことは、書經の益稷の篇の明示する所である。さて此の十二章は何を象徵したものであるか。この内、日・月・星辰の三ツはその明にとり、山は仰ぐにとり、龍は變化にとり、華蟲は雉であつてその文にとり、宗彝は宗廟の彝樽であるが、その彝樽には虎と雉（手長猿）とを畫いてあるから、即ち虎はその嚴にとり、雉はその智にとり、藻は水草で華蟲と同じくその文にとり、火は日月星辰と同じくその明にとり、粉米は白米であつてその潔にとり、黼は斧であつてその斷にとり、黻は亞のことであつて君臣離合の道理にとつたのである。而して此等十二章を祭服に描くのは、仁君の心を齊へ、行ひを謹ましめんが爲の戒めの意に外ならぬと云ふ。斯くの如く、元來は、天子は十二章のものであつたが、周の時代になつてからは、この内日・月・星辰の三ツは旌旗に用ひることとなり、祭服からは取り除かれてしまつた。かくて周以後の天子の祭服はたゞ九章を用ひたのみである。而して九章を用ひた祭服を袞といひ、七章の祭服を鷩といひ、五章のものを毳といひ、三章のものを絺といひ、衣に文なくたゞ裳にのみ黻を刺繡する一章の服を玄と云つた。而して祭の大小によつてその用ひる服裝を異にしたのである。以上天子の祭服についてその説明の大體を爲し了へたわけであるが、諸侯・卿・大夫にも亦それぞれの制度が存したのである。繁になるので之を省く。

四、齊

祭祀を行ふに先立つて最も嚴肅に行はるゝ儀式は齊である。禮記祭義に依れば、齊には散齊と致齊とがあつた。散齊は外寢に居ること七日、致齊は内寢に居ること三日、俱に其の間身を慎しみ心を恭しくして齊の状態に居るのである。故に祭祀の日から數ふれば十一日前に此の行事が始まる譯である。齊に就いて述べて居るものは、禮記の曲禮・祭統・祭義・玉藻等の諸篇を始めとし、他の經典にも散見して居るが、其の中祭統・祭義等が稍詳細に纏まつて居るから、大體其等を基にして茲に略説してみたいと思ふ。

齊とは抑々如何なる意味であるか。祭統は之に就いて、齊之爲言齊也、齊不齊、以致齊者也。と云つてゐる。人間の精神を統一集中し、山つて以て精神の徳を致し、神に交はらんとするのが其の原義である。此くの如くして精神の徳を致すことに依つて始めて神明に交はるを得るものであるから、祭統には言葉を繼いで、齊者精明之至也、然後可以交於神明也。と云つて居る。齊はかゝる意味を有するものであるから、此の齊を爲す間は、其の人の言動居住等に就いても細心の注意を拂ふのである。心不苟慮、必依於道、手足不苟動、必依於禮。と云つて居る祭統の言葉は、よく齊の意味を盡したものである。故に當に齊せんとする者は、又曲禮に云つて居る如く、齊者不樂不弔。と云ふ事を守らなければならぬ。樂せずとは音樂を爲して心を樂しましむることをせないと云ふことであり、弔せずとは弔に行つて心を悲しましめないと云ふことである。樂しむ事悲しむ事は共に心の精一を亂すものである。齊する者の心すべき事は獨り此のみではない。味の濁れるものも亦人の心を亂すの故を以て之を避けて居ることは、古い文獻に數多く見えて居る。例へば論語の郷黨篇に、齊者必變食。と出て居るが如き是であり、莊子の人間世に齊する者は酒を飲まず葷を茹らはずといふ事實の存在を示して、顔回曰、回之家貧、唯不飲酒不如葷者數月矣。若此則可以爲齊乎。曰、是祭祀之齊非心齊也。(人間世)と出て居るのも是である。葷とは葱蒜等の類であつて、要するに刺戟の強い物を以て濁れる味と爲し、之を避けたのである。獨りかゝる刺戟物を避けたのみならず、甚だしき御馳走も亦之を避けてゐる。周禮の膳夫に、王齊則不舉。と出て居る。舉とは多くの犧牲を殺して盛饌を供ふるの意味である。此くの如く精神を齊へんが爲に言動を恭み飲食を慎ん

で、以て神明に交らんとするのが齊の意味である。

散齊も致齊も其の精神に於ては變はる所はない。唯致齊は精明の徳を致すと云ふ點に於て其の名を得たるが如く、最も嚴肅に行はなければならない。此の點、散齊に比しては更に特別の心掛を必要とする。祭義の説明する所に依れば、致齊を爲す者は徹頭徹尾其の心を祭らるゝ神の身の上に向けて置く可きであるとして居る。其の居處を思ひ、其の笑語を思ひ、其の志意を思ひ、其の樂しむ所を思ひ、其の嗜む所を思ふ可きであると云つて居る。致齊三日の間は此の如くして心を祭らるゝ神に捧げて居るのである。茲に居處と云ひ、笑語と云ひ、志意と云ひ、所樂と云ひ、所嗜と云つて居るのは、最初に粗なる所、一般的なる所から、漸次精なる所、具體的な所に思ひ至ることであつて、此くの如くして神と己との合一を謀らんとして居るのである。

我が國に於ても祭に先立つて散齊致祭と云ふことが行はれて居る。散祭に當るものを荒忌と云ひ、致齊に當るものを眞忌と云つて居る。荒忌・眞忌の期間は、祭らるゝ神の大祀・中祀・小祀に依つて夫々の相違があるが、此の間に於ける心掛若くは行事に至つては略散齊致齊と同一である。神祇令義の示す所に依れば、此の間は喪を弔ひ、病を問ひ、災を食ひ、刑殺を判し、音樂を爲し、穢惡の事に與かるを禁ずると云ふことになつて居る。全く散齊・致齊の精神である。

以上述べた齊は主として宗廟の祭祀に行はれるものを述べたが、實は獨り宗廟の祭祀に於てのみならず、此の外天を祭り、地を祭り、南郊北郊を祭り、若くは大雩帝・五帝を祭る場合等に於ても、孰れも十日間の齊を行ふのである。社稷の祭、日月の祭、四類・五神・四望・山川等の祭に於ては、十日の齊を用ひず、三日の齊を以てして居る。其等宗廟以外の祭に於ける齊に就いては、金鶚の求古錄禮説の齊必變食の條下に稍々詳しく論じて居る。其の文は左の如し。

天子宗廟四時之祭、每祭皆齊十日。冬至圜丘祭天、夏至方澤祭地、寅月祭南郊、申月祭北郊、仲夏大雩帝、季秋大饗帝于明堂、孟冬祀五帝亦各齊十日。仲春仲秋祭社稷、春秋分朝日夕月、與四類五神四望山川之祭各宜齊三日、又四時迎氣耕藉及群小祀皆宜齊。其中有可相并而省、一年齊期、約有百二十日。(求古錄禮説齊必變食)

五、仕官及び神主

a 祝

祭祀に於て之を取り行ふ主なる役人は祝である。我國の神官に相當する者である。郊特性に、尸神象也。祝將_レ命也。とあるのが此である。

祝の制度は可なり太古に於て存在したものであらう。莊子の中にも既に、尸祝越_二樽俎_一不_レ代_レ之。と出てゐる。

周禮の定むる所によると、祝には大祝小祝があり、又女祝がある。大祝小祝のことは春官の部に出て居り、女祝のことは天地官の部に出てゐる。この外、祝の字の付いてゐるものとしては、春官の部に喪祝・甸祝・詛祝等があるが、喪祝は喪の祝であり甸祝は兵の祝であり、詛祝は盟の祝であつて、共に祭祀の祝とは關係がないから茲には省略しよう。

扱以上擧げた大祝小祝の中、女祝は五后の内の祭祀、内の禱祠等に關係のあるものであり、小祝は小祭祀に關係のあるものであつて、共に祭祀の條としては細説を要する筈であるが、大祝を説明すれば、大體此等のものの性質も明かになし得るから、以下専ら大祝だけに就いて述べてみよう。

大祝の仕事の一に、掌_二六祝之辭_一、以事_二鬼神示_一、祈_二福祥_一、求_二永貞_一。といふことがある。之を一言にして言へば、幸を希求する爲の祝詞を作ることである。六祝とは、一曰順祝、二曰吉祝、四曰化祝、五曰瑞祝、六曰筴祝であり、鄭司農の説明によれば、順祝は豐年を祈ることであり、年祝は永貞を求めることであり、吉祝は福祥を祈ることであり、化祝は弭_二災兵_一を祈ることであり、瑞祝は逆_二時雨_一、寧_二風旱_一ことであり、筴祝は遠_二罪疾_一ことである。

大祝の仕事の二に、掌_二六祈_一、以同_二鬼神示_一といふ語がある。此は要する所六つの事柄について祈禱することである。六祈とは、一曰類、二曰造、三曰脩_二四曰祭_一、五曰攻、六曰說である。この細説については明かになつてゐない。類は師祭であり、造は師を徵すに先だつて先王に造る祭であり、脩祭は災變のある時の祭であり、攻説は日蝕その他陰が陽を犯す場合の祭であるらしい。周禮鄭注には三五の説を擧げてゐるけれども、何れも明言してゐない。以上六祈を掌り其々の祈禱をなす

ものであるが、其の後に鬼神示を同くすると云ふことを行ふのが矢張祝の職掌の一つである。同鬼神示とは、この鬼神示が不和の場合には六厲が現れて害を爲すといふ思想から、之を調和する意味であるのである。

大祝の仕事の三に、作六辭、以通上下親疏遠近といふことがある。之は以下説明するやうな種々の文章を作つて、それによつて先祖の善功を言ひ表はす事である。六辭とは、一曰詞、二曰命、三曰誥、四曰會、五曰禱、六曰誅である。この中、詞とは辭であつて所謂辭令である。命とは命令である。例へば書經蔡仲之命、微子之命の類である。誥は書經の康誥大誥等の誥である。會は會同盟誓の辭であり、禱は禱辭であり、誅は誅辭である。之を作つて祖先と子孫並びに親しい國と疏い國との關係若くは遠近の國の關係を通ずるものである。

大祝の仕事の四に辨六號といふことがある。六號とは、一曰神號、二曰鬼號、三曰示號、四曰牲號、五曰齋號、六曰幣號である。神號を辨ずるとは皇天上帝といふ神號を定めることである。鬼號を辨ずるといふのは皇祖伯某といふ様なことを定めることであり、示號を辨ずるといふのは后土を定めることであり、牲號を辨ずるといふのは犧牲について牛羊等の名を定めることである。齋號を辨ずるとは黍稷の名を定めることであり、幣號を辨ずるといふのは幣帛の名を定める如きことである。

大祝の仕事の五に、辨九祭といふのがある。九祭とは、一曰命祭、二曰衍祭、三曰炮祭、四曰周祭、五曰振祭、六曰擗祭、七曰絕祭、八曰繅祭、九曰共祭である。九祭についての説明も明かではない、鄭司農は命祭より周祭に至るまでのものは祭鬼神祀であり、振祭から共祭までのものは生人祭食之禮であらうといつてゐるが、鄭玄は九つとも生人祭食之禮であるといつてゐる。要するにどの祭には何を食ふかを定めることをやつたものであらう。

大祝の仕事の六には、辨九擗（擗の吉字）といふのがある。九擗とは、一曰稽首、二曰頓首、三曰空首、四曰振動、五曰吉擗、六曰凶擗、七曰奇擗、八曰褒擗、九曰肅擗である。この中稽首とは拜して頭の地に至ることであり、頓首とは拜して頭の地を叩くこと、空首とは頭の地に至ること、振動とは哀慟の慟の如く態度を動かすこと、吉擗とは喪の場合の齊

衰不杖以下の人々の擗であり、凶擗とは喪の場合の三年服の擗であり、奇擗とは先づ膝を屈して拜することであり、衰擗とは再擗であり、肅拜とは唯伏して手を下すことである。この中齊衰不杖以下の人々の拜禮を吉擗といふ理由は、殷の時は凶としたのを周の時喪が浅いから吉としたのである。一説には奇擗は偶數に對する奇數の意味で、隨て一拜の意味だとも云ひ、衰拜の再拜に對して説明して居るのもある。要するに此等の拜禮を定めることが大祝の任務である。

以上が大祝の重なる仕事であるが、この外周禮に説明してゐる所によると、或は犠牲を逆へること、或は尸を送り逆へること、且その禮を助けること、或は鐘鼓に聲ること、或は祭器を陳列し、又之を撤することなどが此の祝の主なる任務になつてゐる。總じて祝の仕事は我國の神官の職分に當るのである。

b 尸

祝に並んで、否寧ろ其以上祭祀の施行に必要な役割を爲すものは尸である。

尸は我國のカタシロである。爾雅の釋詁に依れば、主也とも説明し、士虞禮の鄭注にも同様に解釋してゐるが、尸を主と解することは、尸が祭祀の主となると云ふ現實の上からの説明であつて、決して尸の本來の義ではない。

禮記郊特牲には、尸陳也と出てゐる。陳也とは身體を陳べ伏してゐる意味である。説文に於ても矢張、尸陳也。象臥之形と言つてゐる。此の解釋によると「尸」は「屍」と同一の語源となつて来る。人の死して未だ葬らざる場合には、先づ「屍」にお仕へし、次には庭に「重」といふものを立て、神を之に據らしめる。既に葬つた後には主を立て、神を之に據らしめ、又尸をおいて神にかたどるのである。此の關係は日知錄(卷十四)の古之於喪也、有重、於耐也、有主、以依神、於祭也、有尸以象神、の文によれば大略左の通りである。

葬前 葬後

カバホ 尸……………カバホ

重……………主

さればこそ郊特牲には尸を説明して「神象也」と言つてゐるのである。

孟子滕文公上に孔子の亡くなつた時の話が出てゐる。其の時、子夏・子張・子遊等先輩の門人達は孔子を死せりとする事を遺憾に思ひ、同じ門人仲間の有若が聖人に似てゐるところから、孔子に仕ふる所以を以て有若に仕へん事をはかつた話が出てゐる。曰く、昔者孔子歿、……子夏・子張・子遊、以有若似聖人、欲以事孔子事也之、強曾子。曾子曰、不可。江漢以濯之、秋陽以暴之、皜々乎、不可尙已。(滕文公上)此の話は會々以て尸といふものゝ起源に關する説明と見る事が出来る。即ち死者を死者として考ふる事を欲せざる人情の發露が此の制度を生んだものであらう。

魏書の高允傳を見ると高允が時の文成帝に上書した疏文が出てゐる。當時人が死ぬと尸を立てる、其に幾多の弊害が生じたものと見え、

古者祭必立尸、序其昭穆、使亡者有憑、致食饗之禮。今已葬之魂、人直求貌類者、事之如父母、燕好如夫妻。損敗風化、瀆亂情理、莫此之甚。

と言つてゐる。此等は勿論流弊をのみ論じたものではあるが、矢張尸の起源を説明するに足る傍證であると思ふ。

尸の起源が斯くの如きものであるとすれば、祭祀の中、人鬼を祭るに此の制度の存する事は極めて當然であらう。故に宗廟の祭に尸を立てる事は、曲禮士虞禮其の他幾多の明文が出てゐる。今此等によつて尸の選び方を調べてみると、何れも祭らるゝ者の孫を以て尸と爲してゐる。而して子供は如何なる場合でも父の尸と爲る事を許されない。曲禮の中に、爲人子者……祭祀不爲尸。と云ひ、又、同じ曲禮の別の處に、禮曰、君子抱孫不抱子。此言孫可爲王父尸、子不レ可レ以爲父尸。と云つて居るのが是である。何故に尸には孫を以てして子を以てしないか。祭らるゝ者の孫は祭る人の子である。祖と孫とは昭穆を同じくし、父と子とは昭穆を異にする。孫を以て尸と爲し之に父が事へると云ふ事は、一面子供が父に事ふるの道を明かにする所以である。之に就いて禮記の祭統は、夫祭之道、孫爲王父尸。所レ使爲尸者、於祭者子行也。父北面而事之、所以明子事父之道也。此父子之倫也。と説明して居る。

但若し尸たるべき孫が餘りに幼きに失する場合、又は孫たるべき人の無かつた場合には、右に述べた事は事實上不可能であるから別に適宜の方法を講ぜざるを得ない。その場合には如何に處置して行くか。孫が若し幼きに失した場合に、人をして孫を抱かしむるのである。又孫無き場合は、孫と輩行を同じくする同姓の者を求めて之に當らしむるのである。この事も亦禮記の曾子問其の他に、孔子曰、祭成喪者、必有尸。尸必以孫。孫幼則使人抱之。無孫則取於同姓可也。と説明されて居る。

士虞禮に於ては主人及び賓の位につくこと、次に饌を設けて神に供することなどが第一段として行はれるが、これ迄の間その祭に於ては未だ尸を迎へて來ない。之を陰厭と云ふ。次に尸を迎へて尸に饗し、或は之に獻するの禮をなしてくる。この間を陽厭といふ。虞禮の間の尸は亡くなつた人が男であれば男の尸を用ひ、女であれば女の尸を用ひる。士虞禮記に、男男尸、女女尸と云つてをるのはこの事である。而して女の尸を立てる場合には孫女を以てすることなく、必ずその家の婦を之に用ゐる。士虞禮記に、必使異性と云つてゐるのはこの事である。尸は凡て卒者の上服を服すと云ふことになつて居ひ。此は死者を慕ふ情を尸に依つて幾分偲ぶすがとせんが爲である。祭の場合の尸の位置は、朱子の説明に依れば、常に神主の下に置くことと云ふ事になつて居る。神主はすべて東に向ひ、尸はその北に位して南に向ふのである。尸が坐してゐるか、立つて居るか云ふ事は、時代に依つて變遷を見る。夏の時代に於ては立尸と云ふ事がその禮であり、殷の時代周の時代に於ては坐尸と云ふ事が禮になつて居る。以上の如く尸と云ふものは宗廟の祭祀に於て缺くべからざるものであるが、唯宗廟に祭らるべき人が餘りに若くして亡くなつた場合、即ち殯者の祭に於ては尸を設けない事がある。之は殯者は未だ成人の威儀を保つ事が出来ないと云ふので之を忽略するのである。

以上尸に關する諸雜事から考へてみると、尸の制は人鬼の祭に必然に無かる可らざる者であると同時に、其の尸の制は人鬼の祭以外には有る可らざることが當然ではあるまいかとの疑ひを起さしめる。然るに周禮の他の部分を見ると天地社稷の祭、即ち天神地祇の祭に於ても此の尸を用ひた形跡が見える。先づ周禮夏官節服には、郊祀裘冕二人、執戈送逆

戸ニ從レ車。と出てゐる。郊祀は云ふまでもなく南郊に於て天を祭る事であるが、今其の郊祀に戸を用ひるといふから、天祭に戸を用ひてゐた事が分る。秋官士師には、祀ニ五帝則沃戸と出てゐる。五帝は或は五人帝と解する者もあるが、若し鄭玄の説に従つて之を天帝と解するならば、此亦天祭に戸を用ひた證據となる。天を祭るに既に戸を用ひたとすれば、后土方丘を祭るに又戸を用ひたであらうといふ事は推察するに難くない。更に又秋官士師の條に、若祭ニ勝國之社ニ（稷）則爲ニ之戸ニと出てゐる。此は社の祭に戸を用ひてゐた證據である。而して社に於て既に戸を用ひたとすれば、稷に於ても亦戸を用ひたであらう事を想像する事は難くない。斯くすれば、天地社稷皆戸を用ひたと云ふ事になるのである。詩經の大雅島嶼の詩に「公戸」と云ふ言葉が五度も出てゐる。毛傳は共に之を宗廟の戸と解してゐるが、鄭箋は前二者を宗廟の戸と解し、後の三者に就ては、一つを天地を祭るの戸、二つを社稷山川を祭る戸、三つを十神を祭る戸と稱してゐる。此亦人鬼以外にも戸の存在してゐた事を想像せしむるに足るものである。許慎の五經異義は此の事に關して天神地祇に戸があつたか無かつたかの説の相違は、大體公羊傳と左傳との説の相違から起るものであるとして左の事を云つてゐる。

異義公羊說、祭ニ天無レ戸。左氏說、晉祀ニ夏郊ニ以ニ薰伯ニ爲レ戸。虞夏傳云、舜入ニ唐郊ニ以ニ丹朱ニ爲レ戸。是祭ニ天有レ戸也。謹案、魯郊禮曰、祝延ニ帝戸ニ從ニ左氏之說ニ也。

今許慎の説に基いて考へてみるに、公羊はもとより今文であり、左氏は固より古文であるから、然らば天地の祭に戸ありとするは古文家の説、戸なしとするは今文家の説かと考へられないでもないが、併し亦虞夏傳を伏生の大傳とすれば、此亦今文である筈なのに、古文の左氏と同説であるから、戸の有無は必ずしも今文古文の解釋の相違であるとも論ぜられない。議論は兎に角として、天神地祇の祭に戸を用ひたか否かを後代の記録若くは事實に基いて之を調査してみると、戸を用ひないといふ證據が多くて、用ひたといふ證據は少い様である。且又之を情理に照して考へて見ても、戸の起源が前の説明にして誤無しとすれば、矢張天神地祇の祭祀には用ひないと云ふ方が正しいと見る可きだと思ふ。併し後世でも唐の杜佑の通典等は矢張り周禮の言葉を楯に取つて考へたのであらう、周以前には天地宗廟社稷にも戸があつたと言ふ

主張に立つて、自_レ周以前、天地宗廟社稷一切祭享、凡皆立_レ尸、秦漢以降、中華則無と云つてゐるが、其は寧ろ例外であらう。狩野博士は支那學の中に尸に關する有益な研究を發表せられ、「天地社稷を祀る場合に必ず人を以て之に配享してゐる。既に人を配享するが故に此に尸を用ひたものであらう。」と言はれてゐるが、慥かに此も一つの解釋たるを失はない。併し想像を以てするならば、人を配享するの有無に關せず、人鬼を祭る祭祀の儀典習俗が、理由無しに他の天神地祇の祭祀にも流用されたのではあるまいかと思ふ。

次ぎに尸を立てる制度は何時の時代に始つたものであらうか。禮記の禮器の中には、三代之禮一也。民共由_レ之。…周坐尸、…夏立尸、而卒_レ祭、殷坐尸と出てゐる。之に依つて見れば、三代以來既に此の制があつたと見なければならぬ。儀禮の既夕禮を見ると、商祝夏祝がそれ／＼別の職務に當つてゐる。典禮を尙ぶ自然の結果、斯くも周代に於てすら前代のものを用ひたものであらう。して見ると、祝と略同一の關係にある尸に就ても、典禮を尙ぶの結果周代矢張また夏尸殷尸を用ひたであらうと言ふ事が考へられる。従つて夏殷時代既に立尸の制のあつた事が推察出来るのである。

尸は斯くの如く上代に其の制があつたが、後には此の制も亡びてゐる。通典の説明によれば、此の制は秦漢以後亡びたと云つてゐるが、其は少し言ひ過ぎであつて、少くとも戰國に於ては猶存したと云ふ實例はある。孟子に、孟子曰、敬_レ叔父_二乎敬_レ弟乎。彼將曰、敬_レ叔父。曰弟爲_レ尸則誰敬。彼將曰敬_レ弟。とあるのは其の確證である。左傳にも太公の廟に於て麻嬰が尸と爲つたことが出て居る。但此の以後間もなく此の禮は廢せられたものゝ様である。

尸に代はつたものは像である。祭に像を用ひたことに關する最初の文獻は宋玉の招魂に始つて居る。

蓋しこれ以後は恐らく尸を廢して像を用ひたのであらう。顧炎武の日知錄はその像設の文に於て此事に論じ及び、

古之於_レ喪也有_レ重、於_レ祔也有_レ主、以依_レ神、於_レ祭也有_レ尸、以象_レ神、而無_レ所謂像也、左傳言、嘗_レ於太公之廟、麻嬰爲_レ尸、孟子亦曰、弟爲_レ尸、而春秋以後、不_レ聞有_レ尸之事、宋玉招魂、始有_レ像設、君室之文、尸禮廢而像事興、蓋在戰國之時矣(日知錄、十四像設)

と云つて居る。其の後時代は明確ではないが、大體宋の時代からは、祭に塑像を用ひる習慣が生じた。要するに此の像若くは塑像は孰れも古の戸の遺意を傳へたものと觀る可きであらう。

c 木 主

宗廟には木主を安置する。云ふ迄も無く木主は宗廟の主體であり祭祀の主體である。木主は柁と名付ける。木を以て作つて居るものであつて、説文の所謂宗廟之木主名曰柁。と云ふのが是である。五經要義に依れば、木主の形は我國の位牌に類するものであつて、四方から孔を穿つて中央に於て會つて居る。是はその氣の四方に通ずる事に象つたものである。裏に祭らるゝ人の諡を刻して居る。長さは天子は一尺二寸諸侯は一尺の定めである。摯虞の決疑要注の説明に依ると、この木主は平素は宗廟の西廂の下石函の中に藏められて居るものである。以上が木主の外形上の説明である。

宗廟と木主との關係に就て第一に注意すべき事は、宗廟には決して虚主無しと云ふ事である。如何なる場合にも木主を安置せざる宗廟は存しないと云ふのである。然し乍ら之には唯三つの特別の場合がある。一は天子の崩御諸侯の薨去の場合である。國君の崩御若くは薨去の場合には、親廟の主は悉く太祖の廟に集るが故に、本來の廟には一時主を虚しくすると云ふ形になつて来る。その期間は喪中三年間であるから、従つてこの場合宗廟の木主はその各々の廟に於て三年祭らずと云ふ事になつて居るのである。此くの如く群廟の主がすべて太祖廟に集つて居る事は、恰も我々の人間社會に一家の凶事の有つた場合、親族眷屬がその家を虚しくして不幸の家に相集ると同一の形になるのである。宗廟に主を虚しくする第二の場合は、國君がその國を去る場合である。國君が國を去る場合には、その國の太宰は、羣廟の主を取つて國君に従つて行くと云ふ事が禮である。此は國君の行に於て其祖先を捨て無いと云ふ事を明かにするものであつて、この場合には矢張宗廟に木主が無くなるのである。第三の場合は太祖の廟に於て禘祭を爲す時である。禘祭と云ふのは云ふ迄も無く羣廟の主を集めて合祭するのであるから、羣廟には主の虚しくなるのは當然である。以上の三つの場合を除けば宗廟は常に虚主無しと云ふ事になつて行く。禮記の曾子問に於てはその事を説明して

當_レ七廟五廟、無_レ虛_レ主。虛_レ主者、惟天子崩、諸侯薨、與_レ去_レ其國、與_レ捨_レ祭於祖、爲_レ無_レ主耳。
と云つて居る。

宗廟と木主との關係に就て第二に注意すべき事は、宗廟に二主無しと云ふ事である。此に就ても曾子問に、曾子と孔子との問答が出て居るが、曾子が、喪有_二孤_一、廟有_二二王_一。禮與。との質問に對して、孔子は、天無_二二日_一、土無_二二王_一。嘗禘郊社、尊無_二二上_一。未_レ知_二其爲_レ禮也_一。と答へて居る。つまり一つの宗廟に二つの木主のある事は一つの家に二人の主人のある事の許されないのと同様に許されないと云ふ意味である。之が木主に關する鐵則である。然るに後世に至ると事實一廟に二主の置かれた例が少くない。それは如何なる起源に基くか如何なる意味の轉化であらうか。元來國君が戰爭に出掛ける場合には、或は巡守せらるゝ場合には、常に遷廟の主を齊車と稱する金輅に載せて以て従ふと云ふ事が例である。此は戰爭若くは巡守と云ふ國家の大事が、當に其時の天子一人のお考へではなくして、祖先の意志であると云ふ事を表明する爲である。かの武王が殷の紂王を伐つ場合に、文王の木主を載せて行つたと云ふが如きはその實例である。この場合の木主は只今述べた如く必ず遷廟の主を持つて行くのであつて、決して羣廟の主を持つて行くのではない。故に假令師行巡守の場合でも、羣廟には依然として木主は存するのである。然るに齊の桓公は屢々戰爭を起して戰につぐに戰を以てした爲に一つの遷廟の主を以てしては其の數の足らざるを憂へ、是に於て僞主を作つて之を奉じて師行に従つた。而して戰爭から歸るに及んでは、又其の僞主を遷廟に藏めた。此より以來一廟に二主、若くはより以上の主のある事が行はるゝに至つた。然し乍らその事の正禮に當らざる事は勿論であつて、孔子は之に就いて

昔者齊桓公、亟學_レ兵、作_二僞主_一以行。及_レ反藏_二諸祖廟_一。廟有_二二主_一、自_二桓公_一始也。(曾子問)
と嘆息して居る。

以上祭祀の儀典に關して種々の雜事を列舉した。研究物ではないが、知らずに居つては讀禮の際に困ることもあらうかとの考から執筆したのである。(昭和十四年二月)